

(旧) 県民交流広場 全県オフィシャルホームページ 掲載記事

掲載コンテンツ：リレーコラム

掲載時期 平成 24 年 2 月

テーマ 生き活き人づくり街づくり

寄稿者 篠山市日置地区まちづくり協議会 事務局長 向井祥隆

誇りうる歴史文化がある幸せ

篠山市の東部に位置し、国道 175 号線が東西に走る日置地区は、山間の地にあっても京から西への要衝の地として栄え、「丹波の祇園さん」の愛称で呼ばれる「波々伯部神社」や世界に一本しかない「裸がや」のある「磯の宮神社」など歴史ある神社仏閣や古き時代の主役たちに関わる物語も数多く残っています。

特に今や「丹波」の名称の枕詞的な導入に使われる「黒豆」は、ここ日置の地が発祥地であり、特産「波部黒大豆」が広く丹波地域で栽培され、有名ブランドとなった今では全国各地で「丹波黒大豆」として生産されています。

江戸時代、この地の大庄屋だった「波部六兵衛」が黒豆に着目し、大粒の優良種の栽培を何代もにわたり奨励したところから、全国を代表する大粒の黒大豆が誕生したのですが、「丹波の夜霧」の言葉があるように霧深い地形や気象条件もまた特産品を育てるのに適した環境だといわれています。

子どもたちがふるさとを語るとき、郷土の自慢話ができることで愛着も深くなると考えています。郷土の歴史を知り、特産品を誇りにすることで、この地に関わる生き方がさらに豊かなものとして実感できるからです。

とはいえ過疎化の進行はこの地にあっても例外ではなく、児童数は減少するばかりで、平成 22 年には、近隣の 3 小学校と統合されて「城東小学校」として再スタートしました。

「日置小学校区」は「日置地区」と改称され、新たなコミュニティを形成する課題もできています。

高齢者と子供たちに地域の力を

近年子供や高齢者が犠牲になる事件が多発し、思いがけない災害が勃発する状況にあつて、大きな事件や事故が無いとはいえ、特に高齢化が進む中では、平穏な地域であっても、誰もが不安な生活を余儀なくされています。一人暮らしがやむを得ない状況になったとしても、不安を払拭し、安全に安心して暮らせる地域にするために、住民自らが力を合わせ、心を合わせ、互いに見守りあいながら、福祉・教育・環境・文化・産業等々の地域課題に取り組むため、まちづくり協議会の活動は必要不可欠なものです。

とりわけ子育て世代が地域に魅力を感じることは、安心・安全な地域社会を創ること以上に、心の豊かさを感じられる地域生活ができるように、文化・芸術、自然との共生、仲間づくり等、人としての温かさを基調とした「向こう3軒両隣り」的な活動を創造していくことでしょう。

日置地区まちづくり協議会の活動コンセプトは「学びの里」としました。江戸時代中期に京都の儒学者石田梅岩(生涯学習の祖)が創立した石門心学を大庄屋波部六兵衛が誘致し、日置ではじめた学問所跡「中立舎(ちゅうりゅうしゃ)」があります。寛政8年に開設された学問所ですが、男女共学が実践され1日に903人の出席が記録されているほどに学習意欲に満ちた地域であり、その先人たちの熱い思いを今に伝えるため、現存していた家屋を地域づくりのシンボリックな拠点施設としてよみがえらせました。

そこでは「学びの里」として栄えてきた歴史的・地域的特性を生かし、地域の文化的な礎となるよう、子どもたちを対象に「こころ学講座」を開設したり、高齢者による地域文化の伝承や「いきいき交流サロン」による世代間の交流活動等を展開しています。

生き活きと輝く瞳に出会いたい

歴史と伝統に裏づけされた拠点施設を共有することで、地域活動に和と輪の広がりが生まれ、見守り活動や防災訓練、通学合宿、高齢者等のふれあいサロンなど、地域課題に対する新しい取り組みも始まりました。

これまで個々に活動していた各種団体の地域活動が互いに認識され、新たな事業展開の中では協働による取り組みを進めるために連携が意図されるようになっていきます。

県民交流広場事業も最終年度となり、施設の管理についてはめどがっていますが、ソフト事業に対する資金調達など新しい課題も、市の事業をもとに会員の自助努力も提案していきたいと考えています。

これまで積み重ねられてきた活動を継承しながら、さらに住民相互の協働と参画を図り、地域との関わりが希薄になっている若者の地域参加を呼びかけながら、豊かなふるさと観に根付いた人づくり、街づくりを進めることとなりますが、すでにPTA、消防団等の若い世代が地域リーダー(役員)として参画してもらっており、例えば、防災訓練の代表は、消防団分団長が「安全・安心部会」の部長として活躍。PTA会長が「ふるさと交流部会」の部長として、盆踊り大会や通学合宿を主導しています。

また、郷土史家など地域に深い見識を持つ人たちを委員にすることで、「ふるさと」意識を高める機会が増え、地域の一員としての自覚を子どもどものときから高齢者を共生の手本とすることで高めていけると考えています。

地域の財産である歴史的な施設を再利用することで、共有意識が高まり、新しい地域づくりの拠点が認識され、地域で従来から活動してきた団体を組織化することで、各種団体、各個別の活動が相互に認識できるようになっています。

地域づくりには共有できる財産と生き方(哲学)が必要

子供にとって「豊かなふるさと」とは自然や歴史文化だけではなく、多くの地域住民の中で育てられたという実感であり、「親しく語れる人」「思い出に残る人」こそが、地域人としての生き方を形成する大きな要素であり、「ふるさと観」の根幹となります。

「日置地域コミュニティサイクル」。代々に綿々と繋がり、語り継がれる「日置物語」。世代を超えてふるさとの人間関係は、螺旋階段状のコミュニティを形成しながら、時代の流れに添いながら、時にはその流れをも創る力となって、自らの「土」の力と、時には他地域の「風」の力を融合させ、新しいアイデンティティを持つ「日置」を創ります。

そこには共有できる財産と生き方(哲学)が必要になることを実感しています。